

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

石 井 行 雄

〈論文要旨〉『補忘記』編者・巧智房観応によって編まれた『頭書訂正西谷名目』（元禄十一年（一六九八）刊）は、『補忘記』同様の方式により声点が差されている。
この『頭書訂正西谷名目』の声点をとりあげて、その素性を『補忘記』（主に元禄版によった）の注記と対照することにより考察した。

『補忘記』注と『頭書訂正西谷名目』の差声とにより、語を八種に分類したところ、その依拠する宗派を明らかにし得るものは、第四・八種のものであり、特に天台宗寺門派の読み方に依るものが殆んどであった。
このことから、観応は寺門派の読み方により『頭書訂正西谷名目』に差声したものと思われる。

はじめに

『補忘記』は本来、智山派の論義の指南書であったが、国語アクセント資料としても高い価値を認められている。
『補忘記』の内容が当時いかなる意味を持ち、どのような素材に従って編まれたか、その探求は編者観応の周辺にまで及ぼすべきであろう。

巧智房観応（一六五八―一七一〇）の編著書については、既に『智山学匠著述目録』に数種著録されている。
その中に『西谷名目冠註』なる一書がある。

『西谷名目』は正式には『天台圓宗四教五時西谷名目』と称し、天台宗学の一種の綱要書であり、『大正新脩大藏經』第七十四卷に活字翻刻されている。その著者・著作年代は不明であるものの、其の標題に西谷名目とあることによつて、比叡山十六溪の一つである東塔西谷の学匠の手に成ったものと思われ、足利期の作とも言われる。

多くの注釈が近世行われていたが、その中の一つに観応の『西谷名目冠註』（『頭書訂正西谷名目』）がある。この『西谷名目冠註』には、他の『西谷名目』版本・注釈書に無い注目すべき特徴がある。それは、本文に差声さ
れていることである。声点は全巻要所に差されており、「新濁」「本濁」の別まで明示した、『補忘記』の方式そのものである。

そこで、観応編『西谷名目冠註』を『補忘記』と比較して、『補忘記』解明の手掛りを得たいと思う。
利用する本文は、『補忘記』については白帝社刊の複製本、『西谷名目冠註』は架蔵江戸期刊本を用いた。

I

架蔵本により、『頭書訂正西谷名目』（『西谷名目冠註』）の形態を示しておく。

一、外題（刷題簽）



一、内題

(上本)

天台圓宗四教五時西谷名目卷上

(上末)

西谷名目上^末

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

(下本)

天台圓宗四教五時西谷名目卷下_本

(下末)

天台圓宗四教五時西谷名目卷下_本

一、構成、2卷4冊(上本・上末・下本・下末)

一、法量、タテ27.9×ヘリ19.2cm

一、上本43丁、上末41丁、下本33丁、下末(本文)46丁・(跋)1丁、

一、袋綴(四針眼訂)

一、無地黄土色表紙

一、匡郭、四周单边、(以下二項は本文が上本3丁より始まるので、上本3丁で取る)

外郭 24.2×16.4 内郭 15.8×13.2cm

一、版心



一、跋文(下末)

跋西谷名目冠註

西谷名目冠註行千世久矣舊版蠹損

文字漫滅又且援據不備者往々而在
頃日書肆某来而請余革舊糾繆復補
其闕略余固辞不遑粗枝訂聊裨益以
與之

元禄戊寅冬臘月吉旦

(一六九八)

智積輪下沙門觀応誌

一、刊記(下末)

元禄十一戊寅歲臘月朔旦

(一六九八)

香川判左衛門

林氏 莊五郎

八尾 平兵衛

中野宗左衛門

中野小左衛門

各同志開版

- 一、内郭内本文には声点・返点・傍訓が施されており、漢文による註解をその外に配した構成になっている。
- 一、墨書書込みなし。

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

一、表紙墨書 「^{生玉}遍照院」

尚、跋題・外題・内題の各書名に差がある。本稿では外題により『頭書訂正西谷名目』とする。

II

『頭書訂正西谷名目』（以下、『西谷名目』と略称する）の声点と『補忘記』（収載語彙教から主に元禄版に依った）の声点とを比較して、『西谷名目』に差された声点の素性が『補忘記』に施された読みくせの注記から、どのようなものか明らかにしたい。尚、『西谷名目』『補忘記』の翻字に当っては次の方針によった。

一、声点は被差声字の直後の（ ）内に、平声・上声・去声・入声・フ入声・毘富羅声の別を、（平）（上）（去）（入）（フ入）（毘）として示した。

一、新濁・本濁の場合も、（ ）内に、四声の後に記した。

一、細字双行註の部分はへゝ内に本文と同じ大きさで示した。

一、〔 〕内に『西谷名目』の所在を、冊別・丁数・オモテ・ウラの別の順に示した。

III

『補忘記』との関係で『西谷名目』の差声された語彙は次の八種に分けられる。

第一種

『補忘記』に対応する標出語の見出せない語彙であり、これは二〇四例ある。

1 根（去）性（平・新）〔上本・5才〕

2 所(平) 詮〔上本・9ウ〕

(紙幅の都合で以下3〜204の用例は省略する)

これらは、『補忘記』により読みの素性を判別することはできない。

第二種

『補忘記』に対応する標出語は見出せるものの、いずれの宗派の読みくせであるか、特別の注記の見られないものがある。これは六十例ある。但し、九例は『補忘記』の声点と異同がある。(以下、出現順に番号を付し、『西谷名目』の用例の後に『補忘記』『元禄版』の本文を示す。番号を○で囲ったものは声点に異同がある。)

1 聖教(平・新)〔上本・3才〕 聖(平)教(平・新)

2 圓(去)教(平・新)〔上本・5ウ〕 圓(去)教(平・新)

3 折(入)空(上)觀(平・新)〔上本・10才〕 折(入)空(上)觀(平・新)〔空、字去声^{ニスルハ}不可〕

4 體(平)空(去)觀(平・新)〔上本・10才〕 體(平)空(去)觀(平・新)

5 毘(上・本)曇(上)論(平)家(上・新)〔上本・21才〕 論(平)家(上・新)

⑥ 迦(上)旃(上)延(平)經(上・新)〔上本・21ウ〕 加旃(上)延(上)經(去・新)

7 論(平)家(上・新)〔上本・22ウ〕 論(平)家(上・新)

⑧ 七(入)方(上)便(平輕・本)〔上本・22ウ〕 七方(上)便(平・本)〔三賢四善根也 方、字上声半濁〕

9 總(平)想(平・新)念(平)處(平・新)〔上本・24才〕 總(平)相(平・新)念(平)處(平・新)

10 士(平・本)夫(上・本)〔上本・24ウ〕 士(平・本)夫(上・本)

11 五(平・本)根(去)〔上本・39ウ〕 五(平・本)根(去)

12 増(去・本)長(平・新)〔上本・40才〕 増(去・本)長(平・新)

13 聖(平)者(平・新)〔上末・1ウ〕 聖(平)者(平・新)

14 第(平・本)十(フ入・本)〔上本・4才〕 第(平・本)十(フ入・本)地(平・本)

⑮七(入)返(平)受(平・本)生(去)〔上本・7才〕 七(入・本)反(平・本)受(平・本)生(去)

16 三(去)天(上・新)〔上末・19才〕 cf. 三(去)十(フ入・本)三(去)天(上・新)

17 大(平・本)梵(平・本)天(去・新)〔上末・19才〕 cf. 梵(平・本)天(去・新)〔或一義ニ梵衆梵補

梵天ノ時去声ニスルハ誤也〕

18 三(去)天(上・新)〔上末・21才〕 cf. 三(去)十(フ入・本)三(去)天(上・新)

19 六(入)通(去)〔上末・27才〕 六(入)通(去)

20 羅漢果(平・新)聖者(平・新)〔上末・28才〕 cf. 聖(平)者(平・新)

21 辟支(上)迦(上)羅(上)〔上末・30才〕 辟(去・本)支(上)迦(上)羅(上)〔台家ニハ辟ノ字清ム辟

(入)支(上)佛(入・本)ノ時モ同シ〕 この用例は、「辟」字に差声されていないため第二種に分類せざるを得ない。

22 天(去)上(平・本)天(去)下(平・本)唯(去)我(平輕)独(入・本)尊(去)〔上末・39ウ〕 cf. 天

(平)下(上・本)〔吳音ニハ云ニ天(上)下(平・本)ト〕

23 鹿(入)野(平)苑(去)〔上末・40ウ〕 鹿(入)野(平)園(去)

24 八(入)人(去)地(平・本)〔下本・4ウ〕 八(入)人(去)地(平・本)〔通(上)教(平・本)ノ十地

ノ第三地也〕

25 阿那(上)含(上・本)果(平)〔下本・5才〕 cf. 阿(上)那(上)含(上・本)

- 26 動(平・本)踰(平)塵(去・本)却(フ入)〔下本・7才〕 cf. 塵(去・本)却(フ入)
- 27 真(去)諦(平・新)理〔下本・8才〕 真(去)諦(平・新)〈真俗二諦〉真諦及真諦三藏_モ 同_シ 樣_ニ 唱_ル
也
- ②8 圓(去)教(上・新)〔下本・9才〕 圓(去)教(平・新)
- 29 果(平)頭(上・本)無(上)人(上)〔下本・9ウ〕 果(平)頭(上・本)無(上)人(上)
- ③0 分(平・本)齊(上・新)〔下本・16才〕 分(平・本)齊(上・本)
- 31 塵(去・本)沙(上・新)〔下本・16ウ〕 塵(去・本)沙(上・新)
- 32 塵(去・本)沙(上・新)〔下本・17才〕 塵(去・本)沙(上・新)
- 33 無(上)明(上)惑〔下本・17才〕 cf. 無(上)明(上)住(平・本)地(平・本)
- 34 折空(上)〔下本・17才〕 cf. 折(入)空(上)觀(平・新)〈空〉字去声_{ニスルハ}不可_也也
- 35 體(平)空(去)〔下本・17才〕 cf. 體(平)空(去)觀(平・新)
- 36 相(去)似(平・本)即〔下本・29ウ〕 cf. 相(去)似(平・本)
- ③7 分(平・本)真(去・新)即〔下本・31才〕 分(平・本)真(去・本)即
- 38 頓(平)教(平・新)〔下本・2才〕 頓(平)教(平・新)
- 39 不(上)定(平・本)教(平)〔下本・2才〕 cf. 不(上)定(平・本)
- 40 華(上)嚴(上・本)經(上・新)〔下本・4ウ〕 華(上)嚴(上・本)經(上・新)〈經〉字濁音
- ④1 阿(平)含(去・本)經(上・新)〔下本・4ウ〕 阿(上)含(上・本)經(上・新)
- 42 般(去)若(平)經(上)〔下本・4ウ〕 般(去)若(平)經(上)
- 43 法(平)華(上)經(上)〔下本・4ウ〕 法(平)華(上)經(上)

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

- 44 梵(平・本)網(去)經(上・新)〔下末・9才〕 梵(平・本)網(去)經(上・新)
- 45 根(去)機(上)〔下末・11ウ〕 根(去)機(上)
- 46 真(去)諦(平・新)偏(去)真(上・新)理〔下末・16ウ〕 cf. 真(去)諦(平・新)〔真俗二諦、真諦及真諦二藏_モ同_シ様_ニ唱_ル也〕 cf. 偏(去)真(上・新)之理(平)
- 47 仁(去)王(上)經(上・新)〔下末・24才〕 仁(去)王(上)經(上・新)〔仁(去)王(上)經(上・新)〔仁(去)王(上)般(上)若(平)經(上)〕〕
- 48 仁(去)王(上)經(上・新)〔下末・24才〕 47に同じ
- 49 身(去)子(平・新)〔下末・29ウ〕 身(去)子(平・新)
- 50 希有難(去)解(平・本)〔下末・31才〕 cf. 難(去)解(平・本)
- 51 涅(平)槃(去)經(上・新)〔下末・32才〕 涅(平)槃(去)經(上・新)
- 52 生(去)處〔下末・33ウ〕 生(去)處(平・新)
- 53 彈(去・本)指(平・新)散(上)華(上・新)是(平・本)緣(去)因(上)種(平)〔下末・34ウ〕 cf. 彈(去・本)指(平・新)
- 54 空(去)却〔下入・本〕〔下末・36ウ〕 空(去)却〔下入・新〕〔四却、随〕
- 55 四(平)乘(上)觀(平)智(平)〔下末・37ウ〕 四(平)乘(上・本)觀(平)智(平)〔乘、字為_ニスル_ハ去声_一不_レ宜也〕
- 56 法(入)相(平)宗(上・新)〔下末・41ウ〕 法(入)相(平)宗(上・新)〔云_ニ論(平)疏(平)法(下入)相(平)一_ト時_ハ云_ニ法(下入)相(平)一_ト名_クル_ニ宗_ニ之時_ハ云_ニ法(入)相(平)一_ト〕
- 57 大(平・本)乘(去・本)經(上・新)〔下末・41ウ〕 大(平・本)乘(去・本)經(上・新)〔經、字濁_ル〕

58 法（入）相（平）宗（上・新）〔下末・42才〕 56に同じ
 59 三（去）論（平）宗（上・新）〔下末・42ウ〕 三（玄）論（平）宗（上・新）
 ⑥〇 華（上）嚴（上・本）宗（上）〔下末・42ウ〕 華（上）嚴（上・本）宗（上・新）
 これらは標出語の読み（当山〔智積院〕の読みと思われる）と一致することを示すのみで、積極的にその宗派を示すものではない。又、○印の九例は標出語の読みと一致しないことを示すのみで、やはり、積極的にその依拠する宗派を示すものではない。

第三種

『補忘記』に対応する標出語が見出すことができ、且つ宗派に対する注記はあるものの、『補忘記』の標出語形に一致するものがある。これは九例ある。（以下、第二種と同様の方法で翻字する）

1 権（去・本）教（平・新）〔上本・5ウ〕 権（去・本）教（平・新）〈教、字唯識宗^{ニハ}清〉

2 色（入）究（平）竟（平）天（上・新）〔上末・21才〕 色（入）究（平）竟（平）天（上・新）〈天、字唯識宗^{ニハ}清〉

3 上中品（平・新）〔上末・21ウ〕 cf. 上（平・本）品（平）中（去）生（上・新）〈浄土家^{ニハ}上（平・本）品（平・新）^モ下品（平・新）^モ俱^ニ濁^{ルト}當山^{ニハ}中（去）品（平・新）^ト中（去）生（上・新）^{トノミ}濁^ル〉
 4 中中品（平・新）〔上末・21ウ〕 cf. 3に同じ

5 無（上）慚（上・本）無（上）愧（平・新）〔上末・26才〕 無（上）慚（上・本）無（上）愧（平・新）〈有云唯識宗^{ニハ}云^ニ慚（去・本）愧（平・新）^ト時^ハ愧、字濁^リ云^ニ無（上）愧（平）^ト時^ハ愧、字清^ム當山^モ准^ニ唯識宗^ニ用^レ之^ラ云^ム師、云無（上）愧（平・新）^ノ時^モ愧、字濁宜也〉

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

6 三(去)生(上・新)六(入)十(入・本)切(フ入)〔上末・32才〕 三(去)生(上・新)六(入)十(入・本)切(フ入)〔生〕字唯識宗^{ニハ}清也

7 空(去)假(平・新)中〔下本・17才〕 空(去)假(平・新)中(上)〔或云山門^{ニハ}空(上)假(平・新)

中(上)^ト連続、之時^ハ空^ノ字上声^{ニシ}不^レ引読^ム空(上)假(平・新)中(上)^ト是^レ西谷^ノ名目也云云

8 権(去・本)教(平・新)〔下本・20ウ〕 権(去・本)教(平・新)〔教〕字唯識宗^{ニハ}清

9 分(去)身(上・新)〔下本・25ウ〕 分(去)身(上・新)〔分〕字去声^{ニシ}而清^{シテ}用^ル也 禪家^{ニハ}云^二分(平・

本)身(去・新)^ト

これらのものは標出形(當山〔智積院〕のものと思われる)に一致する。細字註部分に、1・2・5・6・7・8は「唯識宗」の読みを、3・4は「浄土家」の読みを、9は「禪家」の読みを、7は「山門」の読みをそれぞれ示しているが、それらには一致しない。従ってこれら用例も積極的に『西谷名目』の読みの拠所を提示し得るものとはならない。

但し、7の用例は問題を孕む。というのも、細字双行註部分で「山門」の「西谷^ノ名目」であることを明示している読み方に一致しないのである。すると、『西谷名目』に示された読み方は山門西谷の伝統的読みから乖離したものであることを予想させるのである。

第四種

『補忘記』に対応する標出語があり、且つ宗派に対する注記が存在するものの内、天台宗(寺門派・山門派に共通するもの)の語形であることの判明するものがある。これは八例見られる。(以下、挙例順に番号を付す。他の例示方法は第二種と同じ。)

次の二例は「台家ニハ」「天台テハ」として『補忘記』に示されている読みに一致するものである。

1 辟(入)支(上)佛(入・本)陀(上・本)〔上末・30才〕 辟(入・本)支(上)迦(上)羅(上)〔台家

ニハ 辟ノ 字清ム 辟(入)支(上)佛(入・本)ノ 時モ 同シ

2 法(フ入)界(平)性(平)論(平)〔下末・24才〕 法(入)界(平)性(平)身(去)〔身ノ 字清テ 用ニ

天台テハ 総ノ 云フ 法(フ入)界(平)ノ 浄土家亦同レ 之ニ

次の五例は「台家亦同」といったような形で示されるものである。

3 元(去・本)品(平・新)無(上)明(上)〔下本・26才〕 元(去・本)品(平・新)無(上)明(上)〔台

家皆如レ 是

4 十(入・本)法(フ入)成(去・本)乗(上・本)〔下本・29才〕 十(入・本)法(フ入)成(去・本)乗

(上・本)〔法〕字平濁台家亦尔也

5 分(平・本)證(平・新)佛果〔下本・31才〕 cf. 分(平・本)證(平・新)〔凡ノ 初住分證ト 続ク 時ハ 證

ノ 字濁ル 也 台家並ニ 華嚴宗亦同シ 唯識宗ニハ 是ノ 時モ 清也

6 一品元(去・本)品(平・新)無明〔下本・32才〕 元(去・本)品(平・新)無(上)明(上)〔台家皆如

レ 是

7 三車(上・新)〔下末・29ウ〕 三(去)車(上・新)〔羊鹿牛也 台家亦尔〕

次のものは「寺門山門皆同也」として、天台宗汎用のものであることを明示している。

8 因(去)縁(上)説(入・新)〔下末・29ウ〕 因(去)縁(上)説(入・新)〔寺門山門皆同也〕

第五種

『補忘記』に対応する標出語があり、且つ宗派に対する注記が存在するものの内、天台宗寺門派（三井寺）の語形であることの判明するものがある。これは五十例である。（例示方法は第四種に同じ。）

次の二十七例（内二例は両点）は『補忘記』に「三井ニハ」と示されている読みに一致するものである。

- 1 相（平）即（入・新）融通（上・新）〔上本・6ウ〕 cf. 相（平）即（入）相（平）入（フ入）〔即〕字三井^{ニハ}濁^ル ヲ融（去）通（上・新）〔華嚴宗亦尔也 三井^{ニハ}云^{ニテ}融（上）通（上・新）^ト融^ト字不^レ引〕
- 2 集（入）諦〔上本・12ウ〕 集（入・本）諦（平）〔唯識亦同 三井^{ニハ}云^{ニテ}集（入）諦^ト〕
- 3 集（入）諦〔上本・29ウ〕 2に同じ
- 4 集（入）諦（平）〔上末・3ウ〕 2に同じ
- 5 三果（平・新）〔上末・7オ〕 三（去）果（平）〔預（平）流（上）一（入）来（去）不（上）還（平・本）或^ハ後三果也 果^ノ字三井^{ニハ}濁^歟〕
- 6 阿（平）羅（上）漢（平）果（平・新）〔上末・11オ〕 阿（平）羅（上）漢（上）果（平）〔唯識宗亦尔也 三井^{ニハ}果^ノ字濁也〕
- 7 因（去）果（平・新）撥（入）無（平・本）〔上末・14ウ〕 cf. 撥（入）無（上）因（上）果（平・新）〔三井^{ニハ}無^ノ字平声^{ニテ}而濁音^ヲ用^{ヒテ}云^{ニテ}撥（入）無（平・新）因（去）果（平・新）^ト〕
- 8 梵（平・本）輔（平・新）天（去・新）〔上末・19オ〕 梵（平・本）補（平）天（去）〔補〕字半濁 唯識宗^ノ名目^モ尔也 三井^{ニハ}補^ノ字濁也〕
- 9 光（上）師（上・新）〔上末・21ウ〕 光（上）師（上・新）〔俱舍〕光^ノ記^ノ作者光（上）法（入）師（上）也 三井等^{ニモ}光（上）師（上・新）^ノ時^ノ師^ノ字濁
- 10 相（平）即（入・新）〔下本・2オ〕 1に同じ

11 阿(平)羅(上)漢(平)果(平・新)〔下本・5才〕 6に同じ

12 習(入)氣(平)〔下本・5ウ〕 習(入・新)氣(平)〔唯識亦同也 三井^{ニハ}習^ノ字清〕

13 三(去)根(上・新)〔下本・9才〕 三(去)根(上)〔三井^{ニハ}根^ノ字濁〕

14 雙(平)非(上・新)用〔下本・17ウ〕 cf. 雙(平)非(上)〔非^ノ字三井^{ニハ}濁〕

15 從(上・新)空(上・新)出(入)假(平)觀(平)〔下本・18ウ〕 cf. 從(上・本)空(上・新)出(入)

假(平)〔三井^{ニハ}名目也 或^カ云山門^{ニハ}云^ニ從(上・新)空(上)出(入)假(平)^{一ト}〕

16 相(平)即(入・新)融(上)通(上・新)〔下本・27ウ〕 1に同じ

17 遍(平)応(去)法(フ入)界(平)〔下本・31才〕 cf. 法(入)界(平)〔三井山門并^ニ浄土宗^{テハ}俱^ニ云

ニ 法(フ入)界(平)^{一ト}當山^{デモ}事相部^{デハ}云^ニ法(フ入)界(平)^{一ト}〕

18 波(上)羅奈(平・新)國〔下末・11ウ〕 並(上)羅(上)奈(上)國(入)〔奈^ノ字三井^{ニハ}用^ニ代^ノ音^{一ラ}

云^ニ波(上)羅(上・本)奈(平・新)國(入)^{一ト}〕

19 生(去)蘓(上・新)味(平)〔下末・15才〕 cf. 生(去)蘓(上)〔熟(入・本)蘓(上)也 蘓^ノ字何

レモ 清也 三井^{ニハ}各濁^ル也 然^ル生^ノ字^ハ或上声亦得〕

20 證(平)果(平・新)〔下末・16才〕 證(平)果(平・新)〔勝(平)果(平・新)聖(平)果(平・新)

証(平)果(平・新)何^{レモ}果^ノ字濁^ル小果(平)^ノ時^{ノミ}果^ノ字清^{ムカ}當山^ノ名目也 三井^{ニハ}聖(平)果(平)

時^モ清〕

21 大(平・本)集(入)經(上)〔下末・21才〕 大(平・本)集(入・新)經(上)〔二字押也 或云經^ノ字

去声^ト云云然^ル經^ノ字無^{レキ}之^レ時^ハ云^ニ大(平・本)集(フ入・新)^{一ト} 唯識宗亦尔也 三井^{ニハ}集^ノ字総^ツ

清^{シテ}云^ニ大(平・本)集(入)經(上)大(平・本)集(フ入・新)^{一ト}〕

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

22 熟(入・本) 蘓(上・新) 味(平)〔下末・22ウ〕 19に同じ

23 劣(入) 応(平) 身(上・新)〔下末・33ウ〕 cf. 応(平) 化(平) 身(上)〔身、字三井^{ニハ}濁^ル也〕

24 勝(平) 応(平) 身(上・新)〔下末・33ウ〕 cf. 23に同じ

25 通(上) (去) 教(平・新)〔上本・5ウ〕 通(上) 教(平・新)〔山門、名目也 根嶺随^フ之^ニ 寺門^{ニハ}云^ニ

通(去) 教(平・新)〔ト〕

26 通(上) (去) 教(平・新)〔下本・2オ〕 25に同じ

この内、25・26は両点で「山門」の読みも示している。

次の二十一例は『補忘記』に「三井亦同」とされている標出語に一致するものである。

27 三教(平・新)〔上本・5ウ〕 三(去) 教(平・新)〔三井亦同〕

28 樂(入) 変(平) 化(平・新) 天(上)〔上末・19オ〕 樂(入) 変(平) 化(平・新) 天(上)〔三井亦尔

也 唯識宗^{ニハ}云^ニ 樂(平・本) 変(平) 化(平・新) 天(上)〔ト〕

29 梵(平・本) 衆(平・新) 天(去)〔上末・19オ〕 梵(平・本) 衆(平・新) 天(去)〔三井亦尔也 唯識

宗^{ニハ}云^レ 衆^{シユウト}也〕

30 廣(平) 果(平・新) 天(去)〔上末・21オ〕 廣(平) 果(平・新) 天(上)〔三井亦同也 唯識宗^{ニハ}果、

字 清ム〕

31 声(上) 教(平・新)〔上末・30オ〕 声(上) 教(平・新)〔四(平) 諦(平・本) 声(上) 教(平・新)

三井亦如^レ是〕

32 前三果(平・新)〔上末・31オ〕 前(去・本) 三(上・新) 果(平・新)〔三井亦同^シ 唯識宗^{ニハ}果、字清

也 但^シ 當山^{テモ} 三(去) 果(上)ノ 時^ハ 果、字清〕

33 當(平)通(去・新)機〔下本・7ウ〕 當(平)通(去・新)△三井亦尔也
 34 別教但(去)中(上・新)〔下本・8才〕 cf. 但(去)中(上・新)不(上)但(去)中(上・新)△三井亦尔也

35 不(上)但(上)中(上・新)〔下本・9才〕 34に同じ

36 中(去)根(上・新)〔下本・9才〕 中(去)根(上・新)△三井亦尔也

37 當通(去・新)〔下本・13才〕 33に同じ

38 但(去)中(上・新)不(上)但(上)中(上・新)〔下本・17ウ〕 34に同じ

39 隔(入輕)歷(入)長(去・本)遠(平)教〔下本・23才〕 長(去・本)遠△三井等同之遠、字遠(去)去(フ入・新)時、去声ニ用ユ

40 觀(平)心(去・新)〔下本・29ウ〕 觀(平)心(去・新)△三井亦尔也 天台所立、因(去)縁(上)約(入)教(平)本(平)迹(入・新)觀(平)心(去・新)、四種、釈之随一也

41 轉(平)教(平・新)〔下末・23才〕 cf. 轉(平)教(平・新)付(平)財(去・本)△三井亦尔

42 三(去)周(上・新)〔下末・29ウ〕 三(去)周(上・新)△法(入)譬(平)因(去)縁(上)也 三井等亦尔也

43 法(入)說(入)〔下末・29ウ〕 42に同じ

44 譬(平)說(入)〔下末・29ウ〕 42に同じ

45 中(去)根(上・新)〔下末・29ウ〕 36に同じ

46 相(平)生(去・新)〔下末・41ウ〕 相(平)生(去・新)△三井亦尔

47 無(上)雲(上)天(上・新)〔上末・21才〕 『補忘記』(貞享版)無(上)雲(上)天(上・新)△三井又

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

尔也 南都^{ニハ}天ノ字清^ム也

この内、47は元禄版『補忘記』には見出せず、貞享版に依った。

第五種の中には問題のある用例が数例ある。以下それらを示す。

48長(去・本)短(平・新)〔上末・32才〕

49長(去・新)短(平・新)〔下末・33才〕

元禄版『補忘記』には次のようにある。

長(平)短(上・新)へ如^レ言^ニ長(平)短(上・新)三(去)句(平・新)等^一自宗^ノ法相^ヲ談^{スル}時^ハ如^レ是唱^レ之^ヲ若^シ色法^ノ沙汰及釋論等^{テハ}順^ニ三井^ノ名目^ニ長(去・新)短(平)唱^レ之^ヲ三井并^ニ高野^{ニハ}云^ニ長(去・新)短(平)^一唯識宗^{ニハ}云^ニ長(去・新)短(平・新)^一亦二字^ヲ離^ニ言^フ時^{ニハ}云^ニ長(去・本)短(平)^一也亦二字^ヲ云^ニ長(上)ノ三(去)句(平・新)短(平)ノ三(去)句(平・新)^一也

ところが、貞享版『補忘記』には次のようにある。

長(平)短(上・新)へ言^ニ長短^ノ三句等^一自宗^ノ法相^ヲ談^{スル}時^ハ如^レ是唱^レ之^ヲ若^シ色法^ノ沙汰^ノ時^ハ順^ニ三井^ノ名目^ニ長(去・新)短(上・新)唱^レ之^ヲ三井^{ニハ}云^ニ長(去・新)短(上・新)^一南部及^ニ高野^{ニハ}云^ニ長(去・新)短(平)^一然^ニ當山^ニ二字^ヲ離^ニ云^ニ時^ハ長(去・新)短(平)^一也

元禄版に依ると、48・49の長(去・新)(又は本)短(平・新)は「唯識宗」の読みを反映したものとなってしまう。しかし、貞享版に依ると、「三井」の読みとなる。1・47の例から考えて、この語のみ重ねて「唯識宗」の読み方をするのは、内容から考えても不自然のように思う。元禄版の記述は、あるいは、改版時に錯誤が起きているのではないかと思う。そこで、48・49両例とも第五種とした。

次に

50 波(上) 羅(上) 奈(平) 國(入)〔上末・40〕

は、先掲の18と異同がある。「奈」字が18では(平・新)となっている。『補忘記』の記述から、あるいは他宗のもののようなのであるが、他宗の読みは(上)であつて、(平)ではない。又、50のみ別の読み方をする必要も考えにくいことから、50は(平・新)の誤刻ではないかと考える。そこで、これも第五種とした。

第六種

『補忘記』に対応する標出語があり、且つ宗派に対する注記が存在するものの内、天台宗山門派の語形であることの判明するものがある。これは四例ある。(例示の方法は第四種に同じ)

1 五(上・本) 停(去・本) 心(上)〔上本・24才〕 cf. 五(上・本) 停(去・本) 心(上) 觀(平・新) へ山門ノ名目亦尔也 三井^{ニハ}云^ニ 五(平・本) 停(平・本) 心(去・新) 觀(平)^ト 唯識宗^{ニハ}云^ニ 五(平・本) 停(去) 心(上・停) 觀(平)^ト

これは、「三井」ではなく「山門」名目」に依つたと思われる例である。

2 通(上) (去) 教(平・新)〔上本・5ウ〕 通(上) 教(平・新) へ山門ノ名目也 根嶺随^レ之^ニ 寺門^{ニハ}云

二 通(去) 教(平・新)^ト

3 通(上) (去) 教(平・新)〔下本・2に同じ〕

これらはいずれも両点字であり、山門・寺門の読みを並記してあるのであり、純粹に山門の読みを反映した例とはみなしにくいと思う。

4 極(入・本) 七(入) 返(去) 有(平)〔上末・7才〕 極(入・本) 七(入) 反(去) 有(平) へ反ノ字半濁也 七(入) 反(平) 受(平・本) 生ノ時^ハ 用^ニ反音^ハ 唯識宗 北嶺皆同^シ

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

これは「唯識宗」「北嶺」が皆「当山」と同じ読み方をすることを述べているのであり、積極的に「北嶺」の読みを反映している例とは考えにくいと思う。

すると、山門の読みを反映したと確実に見なせる例は1のみとなってしまう。

第七種

『補忘記』に対応する標出語があり、且つ宗派に対する注記が存在するものの内、三井寺の読みではないことが判明する例が一例ある。

1 雙(平)照(去)〔下本・17ウ〕 雙(平)照(去)〔照〕字三井_{ニハ}濁

『補忘記』に依れば「三井」の読みでは照(去・新)となるはずであり、この用例は三井寺以外の読み方によつたとせざるを得ない。しかし、『西谷名目』下本の次丁ウラ(18丁ウラ)では從(上・本)を從(上・新)と誤刻していると思われるものがあるのである。従つてこの辺りに誤刻が伏在している可能性はある。又、第五種の用例数の多さから考えて、この一例のみ三井寺に反した読み方を採っているのも不自然であろう。

第八種

『補忘記』に対応する標出語があり、且つ宗派に関する注記が存在するものの内、唯識宗の読みによつたと思われる例が一例ある。

1 応(平)身(去・新)〔下本・33ウ〕 応(平)身(去・新)〔唯識宗同〕之

しかし、この用例はあくまでも「同」之であることを示しているのであって、「唯識宗_{ニハ}」といった読み方ではない。従つて、この用例が積極的に「唯識宗」の読みを反映したものとは判断しにくい。

IV

以上、八種の内、第一種・第二種・第三種は、『西谷名目』の声点の素性を考える上に参考とならない。『補忘記』の注記からその素性を積極的に朔り得るのは第四種・第五種・第六種・第七種・第八種である。都合六十四例である。

この内、寺門・山門を問わず、とりあえず天台宗のものであることの判然とするのが六十二例ある。第七種・第八種の各一例は、確例とはなしくく、除外しておく。すると、素性を明らめ得る用例は全て天台宗由来のものである。これは、『西谷名目』という典籍の性格からして当然のことであろう。

次に、天台宗内での寺門・山門の別に注意するとき、第三種第7番用例が問題となってくる。「山門」「西谷名目」に背いた読み方をしているのである。この傾向は第五種と第六種の比率に歴然と表れ、五十対四となっている。しかも、第六種に分類した四例の内、確例とし得るのは一例に過ぎないのである。(むしろ、この一例を疑うべきなのかもしれない。)

このように観応『頭書訂正西谷名目』に差された声点の素性を考えると、全体に寺門の読み方で差されているようである。

まとめ

『西谷名目』の内容に則して考えれば、『頭書訂正西谷名目』の読み方は山門のものに拠るべきだろう。

あるいは、もし智山派における入門書として利用を計ることを考えるなら智積院の読みによるのも自然であろう。

『補忘記』と『頭書訂正西谷名目』と

しかし、そのいずれの可能性をも否定した形で、「三井」の読みに従って観応が差声しているのは、はなはだ注目すべき現象であろう。

さらに、その結果として第一種の語彙群から寺門の読みを推測し得ることと思う。